

短い冬の季節でもらったもの

霜柱に出会った子どもたちの記録から

阿部 康子

はじめに

当園のある豊川市は車で三河湾へ十五分、浜名湖西岸へ三十分という距離にあり、愛知県の西南に位置している。日当たりのよい場所では十二月中旬より「菜の花」が咲き始め、二月立春をすぎると「つ

くし」が顔を出すといった暖かな地域で、過ごしやすいが、四季の中でも冬季は短く、子どもが冬の自然現象、雪や氷に出会う機会は少ない。したがって、この時期の保育では、子どもたちに冬らしさを感じさせるか、保育者にとって一つの大きな課題となるのである。毎日の気象情報から目が放せ

なくなる時期でもあるが、今年は一
月、二月と思いがけない寒気団の到来で、子
どもたちの園生活にも冬の季節にこそ、
の出会いが数多くあり、子どもにとって
も保育者にも心弾む日々が生まれた。そ
んな嬉しい日々の出来事の記録から、子
どもの行動を「子どもが育つ」という観
点でとらえてみた。

一月十一日(木)

三学期が始まって三日目、子どもたち
が降園したあとの職員室は、子ども一人

ひとりが過ごしてきた冬休みのあいだの出来事、

〇〇ちゃんは家族でスキー体験をしたんだって〃

〇〇ちゃんのところには赤ちゃんが無事生まれてお
兄ちゃんになったのよ〃等々、教材準備をしながら
の楽しいおしゃべり。A先生の「来週は寒波が来る

◀大事にひき上げた水を見せる



そうよ。風邪ひきさんが出なきやいいけどね」の発
言に、私は「そうだ！ ひよっとしたら氷が張るか
もしれない、水をバケツに張っておこう」と思い立
ち、ポリバケツ、洗面器に水を張り、庭に出して帰
宅した。

一月十二日（金）

A先生の情報通り、昨夜からかなりの冷え込みとなり、まさに冬を感じさせるに充分な朝を迎えた。気になっていたバケツ、洗面器を出勤一番にそつとのぞく。「出来ていました！ 出来ていました！」そつと水の表面を指で押すとそつと水に沈み、出来立ての氷の薄さが伝わってきた。うっかり触るうものならたちまち砕けてしまいそうな氷である。出来立てのこの姿を子どもに見せたい、私の用意したこの冬一番の初氷とどう出会わせようか、わくわくしながら子ども登園を待った。

八時三十分、「せんせいおはよう」と、まつお、やすひろ、ゆうか、けんちが登園、つづいてまさと、かずき、かよ、はるなど登園、頃合を見計らって子どもたちへ「いいもの見つけたよ、見に来る？」と氷の張ったバケツ、洗面器のある裏庭へと誘う。バケツと洗面器をのぞいた子どもは「これ、

氷？」と私を見た。まさととは「冷蔵庫で作ったのでしょう」と言う。もつと「わあ！ 氷だ、スゴイ！」と驚いてくれるのを期待していた私は少々拍子抜けで、「ほら、指で触ってごらん」と氷に触れるよう促した。と、「ツメタイ！」とゆうかが驚いた表情で「どうやって出来たの？」と不思議がった。かずきは「本当の氷なの？」と不思議顔。温暖で、一年を通して雪が降る、氷が張る、という冬の自然現象に出会うことがほとんどない日常生活の中では、「氷が張る」という自然現象への興味が今一つピンとこないのだな、と思いつながら氷の張ったバケツと洗面器を皆で保育室へ運ぶことにした。

ねえ、氷ってどうやってできるの？ のゆうかの疑問にどう答えものか、気温が〇度に下がったら氷は凍るのよなど、私にはうまく伝えられない、どうしよう……。そこで、寒い冬はみんなが眠った頃、北風に乗って凍る爺さんがやってくるのよ。凍る爺さ

んは水の子が大好きで押しくらまんじゅうをして遊ぶんだって。ヨイシヨ、ヨイシヨと押しくらごっこをしているうちに水の子どもはどんどん固くなつて、透き通つて、綺麗な氷になるの……、と素話として話す（内容は省略）。子どもたちは「ふうん、ほんとかなあ？」といった表情。すると、かずきが「ぼく水を入れておこつと」と動きだす。それに続く人が出て、何人かがままごとのフライパンや鍋、ボールに水を張り、思い思いに寒い場所を探して置き、降園した。

一月十五日（月）

今朝も冷たい空気がピンと張り詰めたまさに冬を感じる朝であった。登園の早い四人が「せんせいおはよう」と声を掛け、「氷できてるか見てくる」と鞆をかけたままの姿で水を張った自分の入れ物を見に走って行った。

しばらくして「せんせい、氷ができとつた」「ほんとの氷だに」と四人が口々に目を輝かせて驚きと嬉しさを顔一杯に広げて、氷の張ったバケツやボウルを見せてくれた。「よかつたね、ゆうべは寒かつたからきつと凍る爺さんがきてくれたんだ」「ぼくとここなかつたに」「お水入れておいた？」「うん」。そんな話をしていると、登園したかずき、まさみちが「お池にも氷ができとるよ」と知らせ、それつとばかりに皆が池に向かった。保育者もバケツを片手に子どもその後を追う。しゅんが「これ、これ」と大事に引き上げた氷を見せる。そのうちかよやはるな、れいたちが園庭のあちこちにできた水溜まりに張っている氷に気付き、バケツへと収穫、次第に氷の美しさ不思議さから、誰がたくさんの氷をすくい上げるかに変化してにぎわっていった。今日も子どもたちは「入れ物に水を張ってお外に出しておく」、と入れ物に水を入れ、ゆうか、かよ、まこ

私たちは色水で氷になるかやってみる、と水性マジックで色をつけた赤やピンク、青色の水を張って降園した。

一月十六日（火）

子どもたちは今朝も登園するなり昨日水を張っておいた自分の入れ物を見に行く。そして「氷ができてしまった」「ぼくのもの」「わたしのもの」と嬉しそうに、手に手に鍋やボウルにできた氷を見せてくれる。色水を張った女児たちは赤やピンク、青色の氷に「きれい！」とうっとり。でも「ぼくのできとらん」と何人かが訴えてきた。「どうしてかな」とどうして氷になったのか、どうして氷にならなかったのかを子どもたちと話し合う。まず、水を張った入れ物を置いた場所はどうだったかが話題になり、ワイワイ話し合ううち、北風がいつぱい吹いてくる寒い場所に置かないと氷はダメ、となり、再びトライして降

園した。

一月十七日（水）

「お外で本当に氷が氷になるのかな、やってみよう」から始まった氷作りが今日で四日目になった。この遊びは日に日にクラス全体に伝播して、どこかで皆がかかわっていることは嬉しい。幸い寒気はまだ続いている。今や子どもたちは登園したらまず一番、氷のできぐあいを見に走る。そして友達と、氷の厚みはどうか、形はどれが面白いかなど話し合いながら今日の遊びが始まっていく形となっている。



▲水溜りに張っている氷をバケツへ収穫

今朝は又一段と冷え込んで冷たい！けれど子どもは、水のできぐあいになり、園庭に出て行く。

やや時間が経って園庭から「せんせい、せんせい、ちょっときて」と大声でまさことが呼ぶ。「どうしたの？」「ちょっときて、しもばしら、しもばしらがある」と叫ぶように言うので私も思わず咄嗟にバケツを持ってまさとの後を追った。そこは昨日水を張った鍋やフライパンを置いて氷ができるのを待った場所。保育室の北側すなわち裏庭であり、小さな滑り台の下ではすでに多くの子どもが、スコップで土を掘り起こしていた。

まさとはその子どもたちの間から大きな土の塊を一つ手の平にのせ「せんせい、これ！」と見せてくれた。まさとの手の平で六角形の氷柱がきっちりと並んでムクムク土を押し上げていた。思わず「スゴイ！ きれいなね」と久し振りに出会った霜柱にすっかり興奮してしまった私は、かよやかなえ、みほと

ちを誘ってまさと一緒に園庭のあちらこちらを霜柱を探してまわった。築山の裾にある、というのを探しているときまさたちが「せんせい、水玉模様のあるところを掘ってみい」というのでよく見ると、土の表面に小さな穴がブツブツと無数にあいている場所がある。シャベルを入れると土が持ち上がり、その下には太い立派な霜柱が朝日を受けて光っていた。見事な霜柱であった。目が慣れてくると、築山のあちこちにいっぱいできていた。かよが「やつぱり凍る爺さんはいるんだ」とみほに真顔で話している。みほが「どうしてこんなにいっぱいきたのかな」と言うのに、「ようちえんは楽しいとこだからきたんだよ」と答えている。

登園した子どもが次々に参加して、やがて園庭の隅々では群れて土に這う子どものおかしな姿が出現し、霜柱探しは盛り上がった。

霜柱探しが一段落したところで、今日一番の発

見！ 霜柱をどこで発見したか、皆で情報交換をすることにしました。子どもたちは互いに「おやまのむこう」「年少組さんの前」「滑り台のどこ」と話すが、「おやまのむこうって池のどこ？」「ちがうよ、こっちのすべれるところの下」「うん？」ということ
で互いの共通理解が持ちにくいことから話し合いは
騒然とするばかり……。『そうだわ、せんせい
が地図を描くから発見場所を丸を書いて皆に知らせ
てあげようよ』と小さな移動黒板に園庭の地図を描く。
地図に書き込む という初めての経験を面白がって
子どもは次々と書き込んだ。すると、いろいろな場
所で発見があったということに気付いたり、「やつ
ちゃんと一緒のところで発見したんだ！」とかずきは
やすひろと笑い合う、そんな姿が出たりして、地図
へ書き込むという作業は子どもたちに新鮮さをもつ
て受け入れられたようであった。「せんせい、ほく
にも地図作ってよ」「わたしもほしい」の声に押さ

れて、「じゃあ、しもばしらマップを作ってみる」
ということ、二十六枚の地図を用意することにな
った。

一月十八日（木）晴

マップを用意して子どもの登園を待つ。登園の早
い子どもたちがしもばしらマップ一番隊として（霜
柱の記号は丸）地図を片手に鉛筆を持ち出かけた。



▲スコップで土を掘り起こすと…霜柱が！

次々と登園した子どもも地図を持って後に続いた。シャベルで土を掘ったり、土を指で持ち上げたりしては、友だちと喋り、遠くで探している友だちに「こつちにあるよ」と大声で知らせたりしながら自分の発見場所をマップに書き込んでいく。楽しげなやり取りの中にも真剣さが伝わってくる姿であった。

一月十九日（金）

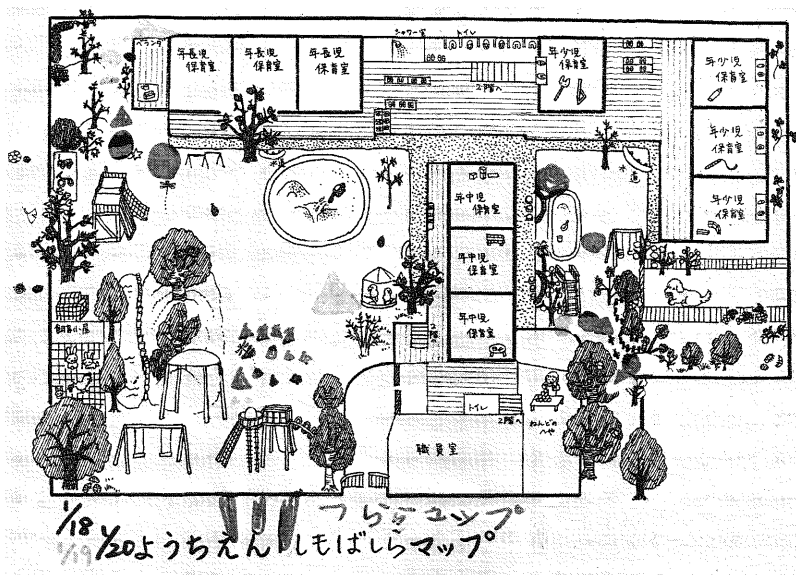
昨日に続いて今日も登園一番の遊びが、マップ片手に霜柱探しで始まった。十五日（月）の水探しで出発したこの遊びが、霜柱発見という新しい展開をして今日に至っている。更に、昨日からは「しもばしらマップを作ろう」と、新たな要素が加わった遊びになってきた。保育者としては、この遊びが何時までつづけられるのか、いくら子どもが面白がっているからといっても興味の持続には限界があるこ

と、特に日常的に繰り返られる遊びとは違ったものであることも考え、終わりをどう迎えるかが気になりだしている。そんなことは関係ない、というように、まさみちがマップを持って「昨日は緑色で書いたけど、今日は何色にしたらいい？」と聞く。

「そうか、昨日と今日は色を変えないといけないね、何色がいいと思う」と無責任な私の答えに、

「昨日緑色だったから今日のはオレンジにする」とオレンジ色のマーカーを持って園庭へ出掛けていった（この記録が左ページのマップ）。

こうして「しもばしらマップ作り」はつづいていくが、一月末頃より寒気が緩み始め、探しても霜柱の姿が見つからなくなると、子どもたちの間で「しもばしらはどこへいったのかな？」「おひさまがいるもんで出てこんだよ」と、しもばしらの行方について会話が繰り返されるようになり、この遊びは中断される。一方、園では「お餅つき」「誕生会」「お



別れ遠足「節分」と行事が続き、二月も半ばには入り、保育者がいよいよマップ作りは終わりにしようと考えた時、再び寒気団の到来となった。

二月十七日（土）

寒波が戻ってきた朝、子どもたちは久々に力強い霜柱を見つけ、太くて長いつららもこの日登場し、マップへの記入は再び盛り上がった。

今月末に生活発表会が行われることから、子どもたちは今「しもばしら発見と凍る爺さんのお話をしよう」と張り切っている。こうして、子どもたちと保育者（私）の冬の季節は終わった。

（愛知県豊川双葉幼稚園）

カッター 筆者